

※詳細は、日本医療マネジメント学会雑誌13巻4号及び第15回日本医療マネジメント学会学術総会ホームページ(下記記載)を参照ください。

お問い合わせ先：

### 第15回日本医療マネジメント学会学術総会

事務局：岩手県立中央病院 業務企画室

〒020-0066 岩手県盛岡市上田1丁目4-1

TEL 019-653-1151 FAX 019-653-4830

E-mail jhm2013-office@umin.ac.jp

運営事務局：有限会社ヤマダプランニング

〒020-0011 岩手県盛岡市三ツ割字久保屋敷13-21

TEL 019-663-1801 FAX 019-663-1802

E-mail jhm15-office@yamada-planning.co.jp

第15回日本医療マネジメント学会学術総会ホームページ  
<http://jhm15th.umin.jp/>

した。今後も、顔の見える関係づくりを基本に、情報の収集と発信を主体的に行い、障がいがあってもその人らしく生活できる社会を築けるよう努力していきたいと思います。

## 2012年度医療福祉連携講習会に参加して

医療法人芳越会ホウエツ病院 武田真紀



総合討論風景

私が、医療福祉連携士を目指すきっかけになったのは、本年度当院が在宅医療連携拠点事業所に採択され、地域の医療と介護、福祉の連携の推進を図る役目が必要になったためです。

当該地域でも高齢化が進み、高齢者世帯、独居の高齢者、認知症の方が増え、家族関係も時代と共に変化し、退院調整をする際様々な問題が生じてきています。講習会に参加し、これらは全国共通の課題であることがわかりました。

医療も機能分化が進み、急性期、回復期、維持期とそれぞれの機能と役割を発揮するよう求められ、早期介入、早期退院が望まれています。講習会参加者は実際に退院調整に関わる人が多く、講義やグループワークを行う中で、連携を担う自分達は、地域における自院の役割を十分理解し地域に発信できているのか、そして地域の各機関の役割を理解しているのだろうかといった意見も聞かれました。また、共通の認識で情報提供が行えていないことから「温度差」が生じているという課題も挙げられました。

これは医療機関に限らず、介護、福祉の分野でも同じではないでしょうか。

私は、地域の各機関との円滑な連携を図るために医療福祉連携士の役割が求められていると感じました。この講習会で学んだことを活かし、今後は地域の各機関の橋渡し役となれるよう、努力していきたいと思います。

## 第2回医療福祉連携士の会 in 佐久平

倉敷市立児島市民病院 松岡邦彦

2012年6月16日(土)、「第2回医療福祉連携士の会 in 佐久平」が東信地区看護連携協議会と共催で長野県佐久平市の長野県佐久平勤労福祉センターで開催されました。

第1部は佐久総合病院の地域活動がまとめられた記録映画「医者として」の上映会でした。座長の若月健一氏より当該記録映画に関する裏話や、地域医療のメッカを創造した若月俊一先生や佐久総合病院スタッフの農村医療・地域医療にける熱い情熱を学ぶことができました。

第2部は「おうちへ帰ろう～医療福祉連携士の取り組み～」をテーマにシンポジウムを開催しました。座長の久保 一郎先生(筑波大学大学院)のもと4人のシンポジスト(十和田市立中央病院・吉村純彦先生、地域包括支援センター堀切・森山 繁氏、市立角館総合病院・茂木 世輝子氏、

## 開催報告

### 分科会・講習会

## 2012年度医療福祉連携講習会に参加して

社会医療法人近森会近森病院 池田 恵美子



演習風景

人口の高齢化や医療の高度化を背景に、「機能分化と連携」は医療を語る上でのキーワードとなっています。急性期病院での退院支援においても、人々の生活そのものの再構築が

求められることも多く、医療のみならず福祉との連携が不可欠な時代となってきました。

医療福祉連携講習会では、共通科目、医療系科目、福祉系科目が準備されており、医療と福祉をつなげるための基盤となる知識を得ることが出来ます。また、日本全国から参加した医療関係者、福祉関係者、事務系職員など様々な職種の方々と議論し、テーマに沿ってまとめ上げていくグループワークのプロセスに連携のエッセンスが組み込まれており、非常に勉強になりました。実習でも、これまで面識のなかった多くの方々に支えられ、視野を広げることができたと満足しています。

講義やグループワーク、実習で学んだことは、「連携の基盤を成すのは、とりもなおさず相互理解である」ということでした。相手の役割や立場を理解すること、自分の役割や立場を説明することが、今後ますます求められてくると実感しました。同時に、誰も経験したことのない高齢社会を迎え、「どんな最期を遂げたいか」を一人ひとりが真剣に考える時が来たのだと、未来への覚悟を迫られた講習会で